

## 第 2 回東日本大震災心理支援報告研修会の報告

第 2 回東日本大震災心理支援報告研修会はおかげさまで大変有意義に盛況のうちに終わることができました。

当日は一般の方々、学生、臨床心理士、ご来賓などあわせて 480 名ほどのご参加を得ました。一般参加者の中には、福島県、兵庫県など遠方からのご参加もいただきました。ポスター展示は岩手県、宮城県、福島県、山形県、東京都の臨床心理士会からの活動報告、岩手県、福島県派遣のスクールカウンセラーの方々の活動報告、日本臨床心理士会が行った全国各都道府県臨床心理士会の支援活動の取りまとめ報告、そして南三陸町の写真展示がありました。

来賓としては、内閣府、岩手県、福島県、伊達市、自衛隊、全国社会福祉協議会、小石川ロータリークラブ、ジャパンソサエティー、株式会社伊藤園、毎日新聞、福祉新聞、ノンフィクションライターなどの方々がそれぞれのご関心のもとにご参加くださいました。

第 1 部では災害初期から今日に至る間の復興への道のりのお話を伺いました。石巻赤十字病院救命救急センター長の石橋悟先生が、発災当初からの医療支援について、日ごろの訓練もあり、またさまざまな職種の連携によって、市民の救命活動に奮闘された経緯、外からの支援チームへの対応の課題なども伝えてくださいました。

南三陸町の高橋昌子保健師様が自らもご自宅を流されながら支援に当たられた経験の中から避難所の状況について、遺体安置所の隣の廊下が避難者の生活空間になっている非日常性の厳しさや、衛生状態への懸念の中、時間を追って変化する課題への対応に終われる支援者の休めない活動を報告されました。

釜石市の洞口祐子保健師様も釜石市での災害の状況から、今日までのさまざまな連携の課題についてお話くださいました。普段は日常性にうずもれている連携の課題がたくさん示されたお話でした。

被災しつつ支援された経験、外からの支援者とのこと、明日は今日の続きとしてあるとは限らない、平時にできていないことは危急の時にできるものではない、日頃からの顔の見える関係がいざという時に力を発揮する、支援は自立的に行うことが不可欠、当事者の自助自立の力に添う支援のあり方が原則、といった大切な認識を伝えていただきました。

指定討論者の小早川義貴先生は災害医療センターから DMAT 事務局として活動されたことをはじめ、現在も福島県でよろず相談室を巡回させて開催されているご経験も踏まえて、支援とは功を目指したり、競争して行うのではなく、無名性の中で、専門職ではあっても、自らの家族の一員でもあり、一市民でもあり、そうした全ての属性をあげて現地に赴くのが現実であり、その場が必要とすることを行う姿勢が不可欠と締めくくられました。

全体をとおして、支援はその時その時の状況の特性に応じてその有りようを変化させてゆくことが必要であり、一人ひとりにおいて求められることは異なること、その差は時間

と共に個別化してゆく、支援という営みはそのような経緯に関わる支援であらざるを得ないことが示されました。これからの長い道のりは、生きるということ、他者と関わること、人はコミュニティーの中にあり、そのコミュニティーの在りようはひとりひとりの在りようの反映でもあるといったことを学ばせていただいたように思います。そして、これらの事柄は、どこでも何時でも共通する、人としてのあり方の指針でもありと考えさせられました。

2部は東北三県の臨床心理士会の活動報告、3部は南三陸町の医療の維持回復に尽力された西澤匡史先生、福島県の小学校で子ども達のこころを教職員全体で支える営みを、教諭の伊藤律子先生が報告、また相馬で避難せず相談室を開設している下田章子氏の報告をうかがいました。放射能被害は、故郷の風景、人や物の形は変わらないけれどその麗しさが傷ついてしまった「あいまいな喪失」の状態であるとの指摘（福島県臨床心理士会成井香苗氏）も印象的でした。

研修会の終了後、南三陸町への東京からの直接派遣は丁度研修会の開催の週で終わることもあり、派遣された方々の同窓会のような部分も含みながらの懇親会にもぎやかに行われました。来賓の方々のご挨拶もいただき、前向きに協力しあいたい、という思いが共有された時間でした。また、東北各県の関係者や臨床心理士も、この機会に改めて懇親の場をもてたことが好評でした。

後日この研修会の内容を取りまとめた冊子を作成する予定です。ご協力くださいました皆様に御礼を申し上げます。  
(心理支援センター事務局長 奥村茉莉子)



